

あまりにも早い終止符<sup>ピリオド</sup>

所 雅彦

少欲の椀ゆたかなり初日出

昨年の正月、高橋先生から頂いた賀状に添えられてあった一句である。

その頃、病状がどんな具合であったのか推察するほかないが、いかにも先生らしい謙虚で穏やかな自足の感慨が読みとれる。しかし、それだけに内実はどんなだったろうかと問い掛けずにおられない。

先生と最初にお会いしたのは四年前、文化学部発足の会合の席であった。第一印象はあくまでも控え目で柔和。その印象は最後まで変わることもなくつづいた。

先生からは、つぎつぎ出版されるご著書を何冊も頂いた。いま、私の部屋の書棚に並ぶそれら作品群を眺めて、なんと精力的な仕事ぶりであったかと、改めて脱帽せざるを得ない。

その一冊を取りだし、綴られた文章の一節を読んでみる。緩やかでふつくらとした文体の中に先生の人柄が滲み出ている。私のような癩症丸出しの瘦せた文章しか書けない者にとって、誠に羨ましい余裕と奥行きがある。この先、どこまでも書きつづけられる持続の意志に満ちみちている。

---

それが、いわば先生の生き方であった筈だ。しかし、現実にはあまりにも早い終<sup>ビリオド</sup>止符だったことか。私の胸の中に激しい哀切の痛みが沸き起こる。

いまは、ご冥福をお祈りするしかない。

合掌

追悼 高橋康雄先生